

絹谷幸太の彫刻

大島 徹也（多摩美術大学 教授 / 多摩美術大学美術館 館長）

わが国には「石の上にも三年」ということわざがある。「(冷たい石の上でも三年すわり続ければ暖まるの意から) たとえつらくてもしんぼう強くがんばれば、やがて報われる」(精選版日本国語大辞典) という意味だが、その時石の冷たさとは、その温度のことだけではないように思われる。無機的で固い、その存在的な冷たさも含意されているのではないだろうか。たとえば矢内原伊作も、『石との対話』という書物の中で、「かたくつめたい石はきびしく生命を拒否している」と言っている。

しかしながら、矢内原はそれに続けて、次のように述べている。「しかし、それだけにかえて、無言の石は、動物や植物以上に自然の力を強く感じさせるのである。われわれは生命のない石に生命以上に力強いなものを感じるのだ」¹。

通常の意味の「生命」ということを超えた、いや「超えた」というよりはむしろ、その根源にある力強い自然の力を、石の彫刻家・絹谷幸太もまた、おそらく感じている。だからこそ、絹谷は木でもなく土でもなく金属でもなく、石と向き合う。そして彼はこう言う。「石は生きている」と。

石をめぐる矢内原の言葉の中で、もう一つ私が注目するのは、「無言の石」という表現だ。「無言」ということは、石という存在に関して、他でもよく言われる。しかしそれは、やはり似たような論法で、まったくものを語らないということではないだろう。そうではなく、堀口大學の詩句を借りれば、「石は黙つてものを言ふ／直かに心にものを言ふ」のである²。そうして絹谷も、石の声に耳を傾け、石に語り返す。

絹谷が近年書いたある文章を読んでいると、その中で彼は次のようなことを言っており、少しはっとさせられた——「投資対象にされた現代美術に対しては、それまでの純粋な憧れと魅力が薄れ、反抗の気持ちさえ芽生えました。そこで群れることの虚しさを感じたのです。私は、自身の欲望を目指すよりも、『自然に近づきたい。石の声を聴きたい』と強く思うようになりました」³。

実際、絹谷と話していると、かつて日本からブラジルに渡り大変な苦勞をした移民の人々へのねぎらい、環境破壊や戦争への怒りと悲しみ、次世代を担うことになる子どもたちへの温かい思いなど、本当に純真な人だと感じる。華やかなく現代美術の世界でもてはやされることなどより、もっと自分にとって大切なもの／ことを、彼は確固として自分の中に持っている。

その絹谷が今回の個展で一つの大きなテーマとしているのは、展覧会の副題にもなっている「宇宙からのまなざし」である。環境破壊や戦争によって地球の状況がいっそう悪化し、人間がこれ以上地球に居られなくなって、他の星に「移民」することになる日が、いずれ来るかもしれない。その時を予期して絹谷は、地球という構造体を象徴するような物質である石を素材として、いま地球に生きる我々が自分たちの生を見つめ直すきっかけとなるような作品を、宇宙的なスケール感覚のもと、我々に提示する。宇宙をも包含し返していくような無限性を感じさせる《Infinite – Mother Earth》をはじめとするそれらの作品はまた、他の星へと移住した未来の元・地球人たちへのメッセージともなるものであろう。

ところで、〈現代美術〉というものへの絹谷の反抗の気持ちに先ほど言及したが、しかし、それは決して、彼が現代美術の偉大な先人たちの仕事にも背を向けているということではない。それどころか、彼は 20 世紀の幾人かの主要な彫刻家たちの芸術を深く吸収しながら、21 世紀の自己の石の彫刻の仕事、未来に向けて発展させてきている。

20 世紀はじめ、コンスタンティン・ブランクーシ (1876-1957) は、表現において重要なのは事物の外面的な形状を捉えることではなく、その事物の本質に迫っていくことであり、そこにこそリアルな表現があると考えた。この考えから、ブラ

ブランクシーの形体はどんどん単純化あるいは純化してゆき、いわゆる「抽象」の次元へと入っていった。絹谷もまた、ブランクシーによって切り開かれた抽象彫刻の道を行く者である。ただ、絹谷は、「石の核心に向き合う」ということを強調している⁴。ブランクシーにとって最も重要だったのは<モチーフの本質>に迫ることであり、そこにおいて彼は石の他、金属や木も用いていた。これに対し、絹谷は徹底して石という素材にこだわる。絹谷にとって重要なのは、どんな主題の作品であり、最終的にどんな形状のものになるかと、まず石の声を聴き、<素材（石）の核心>と対話することなのだった。

石の声に導かれて生まれる絹谷の彫刻は、しばしば、特にジャン・アルプ（1886-1966）のそれを思わせる「有機体的」あるいは「^{バイオモρφイック}生物形態的」な形をしている。ところで、アルプと言えば、彼は他者から絵画や彫刻、とりわけ新造形主義とシュルレアリスムについての見解を尋ねられた際、新造形主義に関しては、その幾何学的な芸術も「生」の問題に直接的に関わっていることは認めつつも、その視覚偏重性を指摘し、新造形主義の芸術は人間が持つその他の能力との関係性を欠いていると語ったことがあった⁵。我々は、そのようなアルプの問題意識の一つのラディカルな展開形を、絹谷の彫刻の仕事に見ることができるだろう。絹谷は、鑑賞者に、自分の彫刻に触れてもらい、五感のすべてを使って感じてほしいと願っている。そうすることで鑑賞者もまた、石の生命を感じ、石の声を聴き、石の核心と対話してゆくことになるのである。

上にブランクシーやアルプに言及したが、絹谷にとってそれ以上に重要なのは、イサム・ノグチ（1904-88）であろう。ノグチが抱いた石への愛や、子どもたちの遊具あるいは遊びの場としての彫刻作品の在り方は、絹谷の仕事に深く受け継がれている。また、ノグチの仕事には、《火星から見える彫刻》という壮大な構想（1947年）もあった。これは、地球上のどこかの砂漠に、人間の顔の巨大な図式的イメージを宇宙に向けて作ろうとしたもので（模型のみで、実現はしなかった）、ノグチはこれを、人類が絶滅してしまったあとに、私たちがかつて地球上に生きていたことを、その時火星に住む者たちに示すものにしようとしたのだった⁶。この《火星から見える彫刻》という1947年のノグチのプロジェクトには、その二年前のアメリカによる日本への原爆投下によって実際に感じさせられた人類絶滅への彼の恐れが反映している。絹谷も、そのような恐れはもちろん感じている。しかしながら、ノグチの《火星から見える彫刻》に比して絹谷の仕事は、まだどうにか取り返しがつきうる現在の地球の状況、世界の情勢において、より強く、直接的に、我々に警鐘を鳴らしている。

2024年2月、川崎の絹谷のアトリエを初めて訪ねた。冬の寒い日で、彼のアトリエに置かれている石々は、思わず手を引っ込めるほど冷たかった。しかし、石についての絹谷の話をいろいろ聞き、石に触ったり、さらには絹谷と一緒に自分でも石を彫らせてもらったりしながら、三年と言わず三時間、自分なりに石と向き合っていると、私にも、その石が発する無言の聲が、自分の心に少し聞こえてきた気がした。

¹ 矢内原伊作（文）・井上博道（写真）『石との対話』淡交新社、1966年、70頁。（奈良本辰也編『日本の名随筆 88 石』作品社、1990年に収録）

² 堀口大樹「石」『人間の歌』寶文館、1947年、84頁。（奈良本編『石』に収録）

³ 絹谷幸太『絹谷幸太 作品集』アルテヴァン、2022年、32頁。

⁴ 絹谷幸太「石の核心に向き合うとき、私の心が彫刻される」『月刊石材』486号（2021年3月）、67頁。

⁵ Jean Arp, “cher monsieur brzekowski” (1927), in *Jours effeuillés: Poèmes, essais, souvenirs, 1920-1965* (Paris: Gallimard, 1966), 63.

⁶ Hayden Herrera, *Listening to Stone: The Art and Life of Isamu Noguchi* (London: Thames & Hudson, 2015), 192.（邦訳：ヘイデン・ヘレーラ『石を聴く——イサム・ノグチの芸術と生涯』北代美和子訳、みすず書房、2018年、241頁）

【執筆者のご紹介】

大島 徹也（おおしま・てつや）
多摩美術大学 教授 / 多摩美術大学美術館 館長

1973年愛知県生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業。東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了。ニューヨーク市立大学グラデュエートセンター美術史学科博士課程修了。博士（美術史）。愛知県美術館主任学芸員、広島大学大学院准教授を経て現職。専門は、西洋近現代美術史。主な共著に *Ils ont regardé Matisse: Une réception abstraite, États-Unis / Europe, 1948-1968* (Musée départemental Matisse, 2009)、『今、絵画について考える』（水声社、2023年）。主な展覧会企画／監修に「生誕100年 ジャクソン・ポロック展」（愛知県美術館・東京国立近代美術館、2011-12年）、「バーネット・ニューマン：十字架の道行き—レマ・サバクタニ」展（MIHO MUSEUM、2015年）。